# 中学校教科書に採用された万葉集教材の変遷

## ――― 歌・作者・学習目標・単元・学習の手引きについて ―――

小 川 雅 子

### 1. はじめに

万葉集は，わが国最古の歌集である。その作品が，古典入門期の学習者にどのように与えられてきたか，その変遷の様子を調査してみることにより，古典学習入門期の学習者に対する指導の観点が明らかになるのではないかと仮説してみた。そこで，戦後四十年間を指導要領改訂期を区切りとして四つの年代にわけて，それぞれの年代における中学校教科書の万葉集の採用状況を概観してみた。

具体的には，どのような歌がどのような学習目標のもとに，どのような単元で採用されているのか。それらの歌の頻度はどうであるか，またそこで意図されている学習課題は何か。これらの点について，年代ごとの違いを調査し，その結果について考察した。

なお，これらの調査結果を検討していく上に参考になると思われるので，明治時代から昭和戦前までの，確認できる範囲の中学校教科書に採用された歌も資料として示した。

### 2. 教材として採用されている歌

資料－1は，戦後の万葉集教材の採用状況を歌番号によって示したものである。

資料－2は，資料－1に示した歌を，歌番号順に整理したものであるが，戦後の教科書における採用状況のみではなく，それらの歌が過去の時代にはどうであったのかも含めて示した。時代区分は，明治・大正期，昭和前期，昭和２０年代，昭和３０年代，昭和４０年代，昭和５０年代の六つとした。（ただし，戦後の年代は，指導要領改訂の年を区切りとしている）その時代に一度でも採用されたことのある歌は，○で示した。小さいマルは，小学校の教科書で採りあげられているものである。

資料－3は，明治・大正期，昭和前期には採用されながら，戦後採用がなくなった歌を歌番号順に整理したものである。

(1) 戦後の年代別にみる歌の採用状況

① 次の表は，資料－1と資料－2の数値を整理したものである。( )の中の数値は昭和５０年代まで存続した6社の平均値を示した。

表－1

| 年代＼歌数 | 歌の種類 | 歌の延べ数 | 1冊あたりの平均 |
|---|---|---|---|
| 昭和20年代 | 83 | 332 | 8.7 (10.0) |
| 昭和30年代 | 70 | 311 | 9.4 ( 9.9) |
| 昭和40年代 | 56 | 135 | 9.6 (10.0) |
| 昭和50年代 | 46 | 131 | 10.9 |

この表を見ると，一冊あたりに採用されている歌の数は，昭和５０年代が最も多いことがわかる。また，一首あたりの採用頻度が最も高いのは，昭和３０年代で，平均 4.4 回となっている。

② それぞれの年代に新しく採用された歌の数と，それらの部立てを多い順に示すと，次のようである。

表―２

| 年代＼部立て | 雑　歌 | 相聞歌 | 防人歌 | 歌日記 | 挽　歌 | 東　歌 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和 20 年代 | 27 | 3 | 3 | 6 | 1 | 4 | 44 |
| 昭和 30 年代 | 7 | 3 | 1 | 3 | 0 | 1 | 15 |
| 昭和 40 年代 | 4 | 4 | 5 | 1 | 6 | 2 | 22 |
| 昭和 50 年代 | 1 | 3 | 2 | 0 | 1 | 0 | 7 |

初出の歌の数が，昭和３０年代，昭和５０年代と，波形を描いて減少していく様子がわかる。それらの部立ての特徴的なことは，(1)昭和３０年代以降の雑歌・歌日記の採用の減少と，(2)昭和４０年代の挽歌・防人歌の採用の増加である。また，各年代を通して，安定した数値で，新しい相聞歌が採用されている点も見逃せない。

③ 表―３は，各年代に採用されている歌の部立てを見たものである。

表―３

| 年代＼部立て | 雑歌% | 歌日記% | 東歌% | 防人歌% | 相聞歌% | 挽歌% | 合計% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和２０年代 | 78.7 | 13.2 | 2.7 | 2.1 | 2.7 | 0.6 | 100 |
| 昭和３０年代 | 76.7 | 13.3 | 2.9 | 2.9 | 3.2 | 1.0 | 100 |
| 昭和４０年代 | 62.3 | 11.1 | 8.9 | 8.1 | 5.9 | 3.7 | 100 |
| 昭和５０年代 | 46.0 | 11.5 | 11.9 | 11.2 | 11.9 | 7.5 | 100 |

こうしてみると，特に，昭和５０年代における雑歌の減少が著しい。東歌，防人歌，相聞歌，挽歌等は，昭和４０年代より僅かに増加の傾向をみせながら，昭和５０年代にはそれぞれ 10％前後の平均した数値を示している。

④ またこれを，歌の内容という点からみると，表―４に示すような数値になる。

表―４

| 内容＼年代 | 愛 % | | | 死 % | | 自然 % | | | | 生活 % | | | | | | その他% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 夫婦 | 親子 | 他 | 辞世 | 他 | 春 | 夏 | 秋 | 冬 | 行幸 | 旅 | 宴会 | 生き方 | 都 | 昔 | |
| 昭和20年代 | 4.8 | 9.9 | 0 | 0.3 | 1.2 | 18.7 | 5.7 | 3.0 | 10.2 | 12.3 | 5.1 | 2.7 | 2.7 | 1.8 | 10.5 | 10.1 |
| 昭和30年代 | 5.7 | 10.4 | 0.6 | 0.6 | 0.6 | 18.1 | 3.6 | 1.6 | 7.1 | 14.2 | 5.8 | 2.9 | 5.5 | 3.9 | 11.0 | 8.4 |
| 昭和40年代 | 17.8 | 15.6 | 2.2 | 0.7 | 3.7 | 15.6 | 5.2 | 0.7 | 6.7 | 10,4 | 3.0 | 0.7 | 3.0 | 1.5 | 8.1 | 5.1 |
| 昭和50年代 | 27.7 | 17.7 | 0.8 | 1.5 | 8.5 | 10.8 | 2.3 | 0 | 10.0 | 6.2 | 0.8 | 2.3 | 3.8 | 0 | 6.9 | 0.7 |

ここでは，昭和４０年代以降の恋愛歌の増加が著しいことが特徴的である。親子間の情愛を歌った歌も徐々に増えている。また，わずかではあるが，他人の死を悼む歌の増加の傾向も見逃せない。

それらとは反対に，自然観照の歌や，当時の生活を反映した歌等は，時代とともに減少していく傾向を示している。

これらの理由として次のような事が考えられるであろう。

1．昭和４０年代からの相聞の歌の増加の傾向

ここには，世相を反映した学習者の実態に応じる意図がうかがわれる。

2．昭和４０年代以降の雑歌の減少。

季節を詠んだ歌の減少は，現代の生活に，花や果物などに切実な季節感が失われて来てていることを反映しているように思われる。

羇旅歌や都・国をしのぶ歌の減少は，旅とか，人生とか，「はるかにしのぶ」ということの感覚が，交通機関や通信の発達によって，薄らいだ世相を反映しているように思われる。

3．昭和４０年代以降の東歌・防人歌の増加の傾向。

これには，専門分野の研究や当時の世相の影響もあろうが，歌を単に歌人のものとして鑑賞させるだけでなく，生活に密着したものとして与えようとする意図が感じられる。

⑤　さらに，表―５は，それぞれの歌に詠みこまれている名詞を分類して，題材の傾向を見ようとしたものである。

表―５

| 名詞の種類／年代 | 固有名詞 | | 自然に関する名詞 | | | 動・植物に関する名詞 | | 人間及び活動に関する名詞 | | | | | 生活に関する名詞 | | | | 抽象的な名詞 | | | | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 地名 | 人名 | 山野 | 川・海 | 空・気象 | 動物 | 植物 | 人 | 神仏 | 精神 | 身体 | 旅 | 社会 | 建物 | 調度 | 衣類 | 位置 | 数 | 時 | 色彩 | |
| | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % |
| 昭和20年代 | 12.1 | 0.6 | 6.1 | 12.1 | 13.7 | 5.4 | 5.6 | 9.1 | 0.7 | 1.5 | 2.2 | 1.0 | 0.2 | 2.4 | 4.5 | 1.1 | 4.1 | 0.8 | 11.1 | 2.3 | 3.4 |
| 昭和30年代 | 12.3 | 0.6 | 5.7 | 14.0 | 12.6 | 5.0 | 5.9 | 10.2 | 0.3 | 2.0 | 1.9 | 0.9 | 0.1 | 1.8 | 4.7 | 0.9 | 3.3 | 1.1 | 11.1 | 1.8 | 3.8 |
| 昭和40年代 | 10.0 | 0.4 | 8.6 | 9.7 | 12.0 | 2.7 | 6.6 | 13.1 | 0.6 | 0.4 | 3.6 | 1.9 | 1.3 | 1.4 | 5.4 | 1.4 | 4.7 | 1.0 | 10.1 | 2.7 | 2.4 |
| 昭和50年代 | 8.7 | 0.4 | 9.6 | 5.7 | 13.4 | 1.5 | 6.8 | 18.6 | 1.3 | 1.5 | 4.5 | 2.2 | 0.6 | 2.2 | 5.8 | 0.9 | 3.5 | 0.6 | 7.7 | 2.2 | 2.3 |

この表から，次のようなことがわかる。

1．固有名詞について

人名は，各年代とも１％未満と，ごく少ない。地名も含めて，４０年代以降は減少の傾向にある。

2．自然に関する名詞について

各年代とも 30％前後の数値を示している。

内訳を見ると，昭和３０年代を除いて「空・気象」　関する名詞が最も多い。これに「川・海」に関する名詞が続くのであるが，昭和５０年代では，「山野」に関する名詞の方が多くなっている。大衆の興味が，汚染された海よりも，山へ向かう時代的傾向を示しているのであろうか。

3．動植物に関する名詞について

両者を比較すると，どの年代も植物に関する名詞の方が多い。またこれらの名詞は，時代とともに減る傾向にある。

4．人間及び活動に関する名詞について

昭和４０～５０年代における増加が特徴的である。これは先にみた，「季節を詠んだ雑歌の減少」と「相聞歌・東歌・防人歌の増加」という現象がこのように表われているように思われる。

その内訳を見ると，人を指すことばと，身体及びその活動を表わす名詞が，４０年代以降増加の傾向にある。

5．抽象的名詞について

各年代とも「時」を表わす名詞が最も多い。

(2)　歌の採用頻度

①　まず，資料―2について，時代を通した歌の採用の特徴を見る。まず目につくことは，どの時代にも共通して採用されている歌が１０首あることである。48. 266．317．318．337．802．803．919．1791．4346．の歌である。

これらの歌の内容を見ると，自然観照の歌に加えて，親子間の情愛を詠んだものが半数を占めている。もともと万葉集には親子間の情愛の歌は数少ないことを考えれば，これは注目すべき点である。

さらに，五つの時代に共通して採用されている歌は，8．28．328．924．1418．1424．4290．4291．4292．の９首である。

家持の歌日記からの３首の他はすべて雑歌である。雑歌の中でも季節が詠まれているもの，行幸に際して詠まれた歌等がある。また，作者の層も，先の１０首にくらべて広くなっている。

②　個々の歌の頻度についてみてみる。戦後，採用頻度の高い歌の上位１５首を示すと，表-6のようになっている。右側の数値は，その年代での採用頻度の順位を表わしている。数値が低い方が頻度の高い歌である。合計は各年代を通した頻度の実数である。

表－6

| | 歌 | 番号 | 作者名 | 20年代 | 30年代 | 40年代 | 50年代 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 田子の浦ゆうち出て見れば… | 318 | 山部赤人 | 1 | 4 | 2 | 1 | 56 |
| 2 | 石走る垂水の上の… | 1418 | 志貴皇子 | 4 | 2 | 3 | 4 | 51 |
| 3 | 我がやどのいささ群竹… | 4291 | 大伴家持 | 3 | 1 | 9 | 6 | 50 |
| 4 | 東の野にかぎろひの… | 48 | 柿本人麿 | 2 | 6 | 3 | 3 | 48 |
| 5 | 銀も金も玉も… | 803 | 山上憶良 | 4 | 5 | 3 | 4 | 46 |
| 6 | 近江の海夕波千鳥… | 266 | 柿本人麿 | 7 | 3 | 12 | 29 | 39 |
| 7 | 春過ぎて夏来るらし… | 28 | 持統天皇 | 6 | 8 | 3 | 12 | 37 |
| 8 | 信濃道は今の墾り道… | 3399 | 東　歌 | 18 | 15 | 1 | 2 | 30 |
| 9 | 熟田津に舟乗りせむと… | 8 | 額田王 | 15 | 8 | 8 | 6 | 29 |
| 10 | わたつみの豊旗雲に… | 15 | 天智天皇 | 8 | 7 | 14 | × | 28 |
| 11 | 若の浦に潮満ち来れば… | 919 | 山部赤人 | 9 | 8 | 9 | 29 | 28 |
| 12 | 春の野に霞たなびき… | 4290 | 大伴家持 | 9 | 11 | 9 | × | 28 |
| 13 | 瓜食めば子ども思ほゆ… | 802 | 山上憶良 | 15 | 12 | 3 | 8 | 25 |
| 14 | 憶良らは今は罷らむ… | 337 | 山上憶良 | 11 | 12 | 23 | 12 | 20 |
| 15 | あしひきの山川の瀬の… | 1088 | 人麿歌集 | 14 | 12 | 12 | 29 | 19 |

採用頻度という観点からみると，先にあげた10首の歌は必ずしも各年代で上位を占めているわけではない。例えば，人麿の266番の歌や赤人の919番の歌などは50年代に入って急にその頻度が少なくなっている。また，317．1791．4346の歌などは，根強い支持を受けながらも，その頻度はあまり高くない。

さらに，特徴として言えることは，戦後高い頻度で採用されている歌には，私が調べた範囲では，初出が昭和前期のものが多いということである。(8．15.28．1418．4290．4291)これについては，後にまた触れる。

(3) 作者別にみる採用の状況

① 表－7 は一人の作者から採用されている歌の多い順に，上位１０人をとりだしてみた。

表－ 7

| | 作 者 名 | 昭和20年代 | 昭和30年代 | 昭和40年代 | 昭和50年代 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大伴家持 | １１ 首 | 8 首 | 5 首 | 3 首 | １７首 |
| 2 | 柿本人麿 | １１ | １０ | 6 | 5 | １５ |
| 3 | 作者未詳 | 8 | 6 | 3 | 0 | １４ |
| 4 | 防　　人 | 4 | 4 | 8 | 8 | １３ |
| 5 | 山上憶良 | 8 | 7 | 6 | 3 | １１ |
| 6 | 大伴旅人 | 4 | 5 | 1 | 2 | 9 |
| 7 | 東　　歌 | 4 | 4 | 3 | 4 | 7 |
| 8 | 山部赤人 | 6 | 6 | 5 | 3 | 6 |
| 9 | 高市黒人 | 3 | 2 | 1 | 0 | 4 |
| 9 | 人麿歌集 | 4 | 1 | 1 | 1 | 4 |

一人の歌人から採用される歌の数は年代とともに限定されてくるが，防人歌はその反対である。また，昭和５０年代に作者未詳歌がなくなっているのも留意すべき点である。

② 作者別に歌の頻度をみたのが表－ 8 である。ここでも上位１０人を示した。上記の表－7 と見較べてみると興味深い。

表－ 8

| | 作 者 名 | 昭和20年代 | 昭和30年代 | 昭和40年代 | 昭和50年代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柿本人麿 | １２．３ % | １６．５ % | １３．３ % | １２．３ % |
| 2 | 山部赤人 | １６．０ | １３．９ | １１．９ | １０．８ |
| 3 | 大伴家持 | １３．６ | １３．６ | １１．９ | 8．5 |
| 4 | 山上憶良 | １２．３ | １２．６ | １３．３ | １０．８ |
| 5 | 志貴皇子 | 5．7 | 7．1 | 5．2 | 5．4 |
| 6 | 東　　歌 | 2．7 | 2．9 | 8．9 | １２．３ |
| 7 | 防　　人 | 2．1 | 2．9 | 8．1 | １１．５ |
| 8 | 持統天皇 | 4．8 | 3．6 | 5．9 | 2．3 |
| 9 | 額 田 王 | 2．1 | 3．6 | 4．4 | 6．2 |
| 10 | 天智天皇 | 3．6 | 4．2 | 2．2 | 0 |

- 自然を詠んだ歌が多い昭和２０年代では，赤人の歌が最も多い。
- 昭和３０～４０年代では，人麿の歌が多くなる。
- 自然を詠んだ歌がやや減りはじめた昭和４０年代には，社会派歌人ともいわれた憶良の歌が多くなっている。
- 昭和５０年代に入ると，家持の作品は更に減少してくる。それに反して，東歌の増加は著しい。また，額田王・防人歌などの増加も見逃せない。
- 家持の歌については，4290．4291．4292の三首が集中的に採用されている。これは，資料－３にある戦前までに採用されている歌とは傾向が異なっている。
- 同様に，人麿の歌も，戦前までの「宮廷讃歌」から，「羈旅派」「相聞歌」へと採用の観点がかわっていることがうかがわれる。

### 3. 学習目標について

ここまで述べてきたような歌が，どのような学習目標のもとに教材化されてきたのか，それについてみることにする。

教科書によっては，その冒頭に，あるいは単元の扉の頁に，その単元の目標を明示しているものがある。また，教科書によっては，単元の目標と学習内容をはっきりわけているものもあるが，そうでない場合も多い。そこで，具体的な活動から抽象的目標まで同じ次元で整理してみた。できるだけ教科書の表現に従うようにしたが，わずかな違いは同じ項目に考えた。それが，表－９である。

表－９

| | 目　標　項　目 | 20年代％ | 30年代％ | 40年代％ | 50年代％ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 読み味わう | 2 | 13 | 12 | 12 |
| 2 | 朗読する | 2 | 6 | 14 | 12 |
| 3 | 祖先の心や生活に触れる | 14 | 5 | 5 | 10 |
| 4 | 作者のものの見方・考え方の理解 | 0 | 6 | 7 | 3 |
| 5 | 感想を表現する | 0 | 6 | 4 | 3 |
| 6 | 古典に親しむ | 4 | 3 | 2 | 7 |
| 7 | 文語文・ことばづかいに慣れる | 4 | 9 | 0 | 0 |
| 8 | 自然・人生について考える | 2 | 0 | 5 | 5 |
| 9 | 情景・心情の理解（味わう） | 2 | 3 | 4 | 3 |
| 10 | 古典（短歌）に関する知識・関心 | 4 | 2 | 5 | 5 |
| 11 | 口語と文語の違いを理解する。 | 4 | 3 | 4 | 2 |
| 12 | 辞書・参考書・注釈書の利用 | 6 | 3 | 4 | 0 |
| 13 | まとまった感想をもつ | 0 | 0 | 5 | 5 |

| | 目　標　項　目 | 20年代% | 30年代% | 40年代% | 50年代% |
|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 詩歌の歴史の理解 | 4 | 5 | 2 | 0 |
| 15 | 用言の活用・助詞・助動詞の理解 | 4 | 3 | 2 | 2 |
| 16 | 読み慣れる | 0 | 5 | 0 | 3 |
| 17 | 現代語に訳す（方法を学ぶ） | 2 | 2 | 2 | 3 |
| 18 | 古文の文体の理解 | 0 | 2 | 5 | 2 |
| 19 | 古典の心（真髄）に触れる | 4 | 0 | 0 | 3 |
| 20 | 様式の特質の理解 | 2 | 0 | 4 | 2 |
| 21 | 伝統に目をそそぐ | 4 | 2 | 0 | 5 |
| 22 | ものの見方・感じ方を深める | 2 | 0 | 0 | 5 |
| 23 | 心（生活）を豊かにする | 4 | 3 | 0 | 0 |
| 24 | 歌のイメージをとらえる | 0 | 0 | 4 | 2 |
| 25 | 味わい方に触れる（学ぶ） | 4 | 2 | 0 | 0 |
| 26 | 古典かなづかいに慣れる | 2 | 2 | 2 | 0 |
| 27 | 現代文によって味わう | 4 | 2 | 0 | 0 |
| 28 | 歌の鑑賞と理解 | 2 | 3 | 0 | 0 |
| 29 | 鑑賞文を書く | 0 | 0 | 2 | 2 |
| 30 | 古典を読む | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 31 | 対句の理解 | 0 | 2 | 2 | 0 |
| 32 | 語句の理解 | 0 | 2 | 2 | 0 |
| 33 | 古典の現代的価値や意義の理解 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 34 | 作歌に興味をもつ | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 35 | 詩歌の魅力にふれる | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 36 | 時代・作者・内容の理解 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 37 | 古い文化のかおりを味わう | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 38 | 祖先の生命力に触れる | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 39 | 祖先の魂を知る | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 40 | 古典をすすんで読む態度を養う | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 41 | ことばについて勉強する | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 42 | 調べたことを書く | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 43 | 人間への理解 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 44 | 作者の意図と表現を読みとる | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 45 | 美にたいする関心をもつ | 0 | 0 | 0 | 2 |

すでに述べたように，学習目標はすべての教科書に明記されているわけではないので，これをそのまま受け入れることはできないが，ある程度の傾向は読みとれるのではないかと考える。

これらの項目を大きく六つにまとめてみると，年代別の特徴がわかる。

昭和２０年代は，「……に親しむ」「……に触れる」といったような，（学習態度）に関するものが50％以上である。（学習態度）に関するものについてはどの年代も一番多いが，このように５０％以上を示すのは，昭和２０年代のみである。さらに昭和２０年代は，（歌の理解）(表現技法の理解）と続いている。これに対して，昭和３０年代・昭和４０年代は，（歌の理解）と(朗読する・書く）という表現活動の事項が続いている。しかし，（歌の理解）や（表現技法の理解)に関する事項は，段々減って，昭和５０年代になると，（朗読する・書く）（自分の考えを深める)という項目が続いている。

このような年代による学習目標の変化は，指導要領等との関連からみても興味深いものがある。

## 4. 単元について

以上に述べたような学習目標のもとに，どのような単元が構成されてきたかについてみてみる。まず，表－１０は，それぞれの単元が，どのようなジャンルの作品を組み合わせているのかをみたものである。各年代を通して頻度の高い順に並べた。

表－１０

| | ジャンル | | | | | | | | | 年代 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 万葉集 | 古典短歌 | 古典俳句 | 古典作品 | 漢文学 | 解釈文 | 近・現代短歌 | 近・現代俳句 | 近代詩・小説 | 昭和20年代％ | 昭和30年代％ | 昭和40年代％ | 昭和50年代％ |
| 1 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | 0 | 6 | 15 | 17 |
| 2 | ○ | | | ○ | ○ | | | | | 22 | 10 | 0 | 0 |
| 3 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | | 0 | 10 | 22 | 0 |
| 4 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | 3 | 0 | 8 | 26 |
| 5 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 6 | 3 | 8 | 8 |
| 6 | ○ | | | ○ | | | | | | 3 | 10 | 8 | 0 |
| 7 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | 0 | 10 | 0 | 8 |
| 8 | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | 0 | 0 | 0 | 17 |
| 9 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | 0 | 0 | 8 | 8 |
| 10 | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | | | 0 | 0 | 15 | 0 |
| 11 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | 0 | 6 | 0 | 8 |
| 12 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | 0 | 6 | 8 | 0 |

| | ジャンル | | | | | | | | | 年代 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 万葉集 | 古典短歌 | 古典俳句 | 古典作品 | 漢文学 | 解釈文 | 近・現代短歌 | 近・現代俳句 | 近代詩・小説 | 昭和20年代% | 昭和30年代% | 昭和40年代% | 昭和50年代% |
| 13 | ○ | | | | | | | | | 10 | 0 | 0 | 0 |
| 14 | ○ | | | ○ | | ○ | | | | 6 | 6 | 0 | 0 |
| 15 | ○ | ○ | | | | | | | | 8 | 0 | 0 | 0 |
| 16 | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ | 0 | 0 | 0 | 8 |
| 17 | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | 0 | 0 | 8 | 0 |
| 18 | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | 0 | 6 | 0 | 0 |
| 19 | ○ | | | | | | | | ○ | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 20 | ○ | | ○ | ○ | | | | | | 3 | 3 | 0 | 0 |
| 21 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | 3 | 3 | 0 | 0 |
| 22 | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | | 3 | 6 | 0 | 0 |
| 23 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 24 | ○ | ○ | | ○ | | | | | | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 25 | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | 3 | 6 | 0 | 0 |
| 26 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 27 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 28 | ○ | | ○ | ○ | | | | | | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 29 | ○ | | ○ | | | ○ | | | | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 30 | ○ | | | | | ○ | | | | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 31 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 32 | ○ | | | ○ | | | | | ○ | 3 | 0 | 0 | 0 |

これをみると，近代・現代の詩歌・俳句・小説の類が昭和30年を境として，ほとんどなくなっていることがわかる。逆に，漢文学を含む単元が多くなっていく傾向がある。では，これらのジャンルには具体的にどのような作品があるのか。それを整理したのが表－11である。（芭蕉の句については，俳句だけが単独で採用されている場合は，「芭蕉」とし，奥の細道からの抜粋の場合は「奥の細道」として数えた。）

表－１１　　万葉集と一緒に単元を構成する作品

| 作品・作者・ジャンル | 昭和20年代 | 昭和30年代 | 昭和40年代 | 昭和50年代 |
|---|---|---|---|---|
| 古今和歌集 | ２４％ | ５９％ | ７９％ | ９１％ |
| 新古今和歌集 | ２６ | ５９ | ７９ | １００ |
| 金槐和歌集 | １１ | ２４ | ２１ | ９ |
| 山家集 | ３ | １５ | ２１ | ９ |
| 良寛 | ８ | ９ | ７ | ０ |
| 橘曙覧 | ３ | ９ | ７ | ０ |
| 大隈言道 | ３ | ３ | ７ | ０ |
| 近・現代短歌 | ３ | ６ | ７ | ０ |
| 芭蕉 | ３５ | ７７ | ５７ | ９ |
| 無村 | ３０ | ７１ | ５０ | ９ |
| 一茶 | ２０ | ４７ | ２９ | ９ |
| 近・現代俳句 | ６ | １２ | １４ | ０ |
| 徒然草 | ３５ | ２４ | ２９ | ９ |
| 枕草子 | ２９ | ３５ | ２９ | ６４ |
| 平家物語 | ２１ | １８ | ０ | ０ |
| 奥の細道 | １１ | ３０ | ４３ | ７３ |
| 源氏物語 | １６ | ４２ | １４ | ０ |
| 能・狂言 | ５ | ３ | ７ | ０ |
| かぐや姫 | ５ | ３ | ０ | ０ |
| 更級日記 | ３ | ３ | ０ | ０ |
| 漢詩 | ２９ | ２４ | ５０ | ６４ |
| 論語 | １６ | １８ | １４ | ９ |
| 故事成語 | ５ | １ | ０ | ０ |
| 近代詩・翻訳詩 | １１ | ２１ | ０ | ０ |
| 近代小説 | １１ | ３ | ０ | ０ |
| 文学史・解説文 | ２４ | ５０ | ４３ | ３６ |
| その他 | ５ | ３ | ０ | ０ |

※　なおこの他に，一つの年代にのみ採用されているものとして次のような作品がある。

昭和２０年代　後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・和漢朗詠集・梁塵秘抄・宇治拾遺物語・古事記・伊勢物語・西鶴・雨月物語・今昔物語

昭和５０年代　百人一首

一見して，昭和２０年代には，多種類の作品から採用されていたことがわかる。この傾向は，

昭和３０年代頃までは続いている。

さらに特徴をあげれば，まず，古典短歌の年代を経るに従っての増加がある。特に，古今集・新古今集の占める割合は，昭和２０年代から昭和５０年代までに３倍以上増加している。しかし，出典の範囲（その他の歌集）についていえば，反対に狭く限定されてきている。

芭蕉の作品については，句だけを単独でのせるより，「奥の細道」の一部をのせる傾向に変わってきている。

漢文学については先に述べた通りである。

近代の詩や小説については昭和３０年代以降，万葉集とは同じ単元に組みこまれなくなっていることも，興味ある現象である。

そこでつぎに，このような単元構成のもとで，万葉集の歌がどのように扱われているかをみることにした。

表―１２　歌の扱い方

| 歌の扱い方 | 20年代 | 30年代 | 40年代 | 50年代 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 語注・作者注 | １７％ | ３６％ | ２９％ | ６４％ | ３０％ |
| 土屋文明『万葉集の話』 | １５ | １８ | 0 | 0 | １３ |
| 語注・作者注・歌意 | 0 | １５ | １４ | 9 | 8 |
| 語注・作者注・歌意（一首のみ） | 0 | 9 | ２１ | 0 | 6 |
| 斉藤茂吉『万葉秀歌』 | １３ | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 佐々木信綱『万葉秀歌』 | １３ | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 解釈文の中で紹介する | 0 | 3 | １４ | ２７ | 6 |
| 歌のみ | 9 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 島木赤彦『万葉集の鑑賞及び其の批評』 | 6 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 語　注 | 6 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 尾山篤二郎の解説文 | 4 | 3 | 0 | 0 | 3 |

一例しかないものは次の通りである。

昭和２０年代／作者注・歌意，柴生田稔・沢潟久孝・次田潤・窪田空穂・谷馨・都築省吾・北山茂夫らの解説（鑑賞）文。

昭和３０年代／柴生田稔・久松潜一・岡部正裕・木俣修・窪田空穂・高藤武馬らの解説（鑑賞）文。

昭和４０年代／久松潜一・山本健吉・池田弥三郎・久保田正文らの解説（鑑賞）文。

この表をみると，昭和２０年代から昭和３０年代にかけては，特にアララギ派の歌人達による鑑賞文や解説文による採用が多い事がわかる。昭和４０年代以降は，語注・作者注のみで歌を採

用する傾向が強くなる。これは，専門分野の研究を反映した現象であると思われる。また，昭和５０年代の解説文は編集部の書下しのものが多い。

### 5. 学習の手引きについて

学習目標のもとに単元が構成され，学習活動が行われるのであるが，そこでどのような活動・能力が要求されているのであろうか。それについて，教科書の手引きをみることにした。ここに整理した項目は，できるだけ教科書の表現に従ったが，わずかな違いは同じ項目として数えた。それが表－１３である。

表－１３

| | 事　　項 | 昭和20年代％ | 昭和30年代％ | 昭和40年代％ | 昭和50年代％ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 朗読する | 5 | １０ | １１ | １７ |
| 2 | 好きな歌の感想（鑑賞）文を書く | 5 | 5 | 8 | 6 |
| 3 | 好きな歌とその理由 | 6 | 5 | 8 | 2 |
| 4 | 他の歌集と歌風の違い | 5 | 4 | 5 | 6 |
| 5 | 情景と心情の理解 | 1 | 2 | 6 | １０ |
| 6 | 歌の（内容）の理解 | 4 | 6 | 5 | 4 |
| 7 | 暗唱する | 4 | 4 | 5 | 4 |
| 8 | 情景や心情を味わう | 1 | 2 | 3 | １０ |
| 9 | 万葉集についての理解 | 6 | 4 | 2 | 2 |
| 10 | 歌の調子を味わう | 5 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 現代語訳を書く | 4 | 3 | 2 | 4 |
| 12 | 作者と作風の理解 | 6 | 5 | 0 | 2 |
| 13 | 他の歌（集・時代）との比較 | 4 | 2 | 2 | 4 |
| 14 | 語句の意味の理解 | 4 | 5 | 2 | 0 |
| 15 | 鑑賞（解釈）文の理解 | 4 | 3 | 2 | 2 |
| 16 | 辞書・参考書で調べる | 5 | 2 | 2 | 0 |
| 17 | 感動の中心の理解 | 1 | 2 | 9 | 0 |
| 18 | 句切れの理解 | 1 | 2 | 5 | 4 |
| 19 | 言葉の調子・リズムを味わう | 0 | 2 | 2 | 8 |
| 20 | 事項の理解 | 1 | 5 | 2 | 2 |
| 21 | 助詞・助動詞の理解 | 4 | 2 | 2 | 2 |
| 22 | 他の歌もよんでみる | 5 | 2 | 0 | 2 |
| 23 | 読み味わう | 1 | 1 | 3 | 4 |
| 24 | 表現の特色の理解 | 1 | 3 | 0 | 4 |

| | 事　　項 | 昭和20年代％ | 昭和30年代％ | 昭和40年代％ | 昭和50年代％ |
|---|---|---|---|---|---|
| 25 | 枕詞・掛詞・体言止めの理解 | 4 | 2 | 2 | 0 |
| 26 | 万葉集の現代における意義 | 1 | 4 | 0 | 2 |
| 27 | 情景の理解 | 0 | 2 | 3 | 0 |
| 28 | 感想を話合う | 2 | 1 | 2 | 0 |
| 29 | 自然や人生について考える | 0 | 1 | 2 | 2 |
| 30 | 感想を書く | 0 | 2 | 3 | 0 |
| 31 | 好きな歌の現代語訳を書く | 1 | 3 | 0 | 0 |
| 32 | 大意をつかむ | 0 | 1 | 3 | 0 |
| 33 | 和歌史の理解 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 34 | 情景を絵や文にする | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 35 | 伝統的叙情の理解 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 36 | 古人の生活の理解 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 37 | 好きな歌を詩にする | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 38 | 歌に句読点をつける | 0 | 1 | 0 | 2 |
| 39 | 社会と文学のつながり | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 40 | 古事記について調べる | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 41 | 当時の天皇観を考える | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 42 | かきぞめに書く | 1 | 0 | 0 | 0 |

これらの項目を，先に述べた学習目標と同じように六つに整理して考えてみる。

昭和２０年代から昭和４０年代まで最も多いのは，（歌の理解）に関する項目である。これに対して，昭和５０年代では，（朗読する・書く）というのが，最も多くなっている。学習目標の場合も含めて，朗読・音読・暗唱といった活動が昭和５０年代には特に重視されていることがわかる。

また，ここで興味深いのは，学習目標において最も多かったが態度的なものは，いずれの年代においても３番目で，９～２２％の間にあることである。態度的なものは，学習目標に掲げても学習課題としては設定しにくいことがわかる。これは例えば，昭和５０年代に，（自分の考えを深める）という関する目標が多かったが，手引きでは，４％にすぎないという点にもあらわれている。

## 6. おわりに

以上のように，万葉集の教材化の状況を概観してまとめられることは，『採用される歌は，世相・専門分野の研究・指導要領の方針・教科書編集者の好み等の要因によって変化する』ということである。これは，歌の扱い方や学習目標，単元の構成，学習の手引等についても同様である。

逆に言えば，万葉集の作品には，どのような時代の要求にも応え得るものがあるということであり，そこに古典の意味を確認したのである。

したがって，古典入門期における万葉集教材の指導は，このことを前提として，教師の好みが優先し過ぎないように留意し，個人に応じた主体的活動を成立させるものでなければならない。今後は，更に教材化されている作品の解釈についても検討して，入門期における古典教材の指導について考察を深めたいと考えている。

・戦後の中学校教科書における万葉集教材の採用状況

資料－１（No.１）

| 年＼教科書会社名 | 日本書籍 | 東京書籍 | 学校図書 | 三省堂 | 教育出版 | 光村図書 | 教育図書 | 中教出版 | 二葉出版 | 秀英出版 | 実教出版 | 開隆堂 | 大阪書籍 | 大日本図書 | 冨山房 | 愛育社 | 修文館 | 市ケ谷 | 大修館 | 日本書院 | 教育図書研究会 | 東陽書籍 | 北陸中央教育図書 | 筑摩書房 | 池田出版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25年 | | | | | | | 28<br>318<br>337<br>1088<br>4291 | | | | | | | | | | | | 28<br>48<br>266<br>318<br>803<br>919<br>978<br>1418<br>4290<br>4291 | | | | | | |
| (26) | 8<br>48<br>58<br>574<br>(802)<br>803<br>919<br>925<br>1511<br>3399<br>4291<br>4346 | 266<br>337<br>375<br>924<br>1418 | 15<br>28<br>48<br>58<br>318<br>328<br>803<br>919<br>4139<br>4291 | 28<br>266<br>318<br>1821 | | | | | 818<br>924<br>1418<br>1424<br>4434 | 28<br>254<br>266<br>375<br>(802)<br>803<br>919<br>924<br>925<br>1088<br>1288<br>1418 | | | | | 48<br>803<br>1424<br>1511<br>4292 | | | 43<br>64<br>375<br>1087<br>1511<br>1639 | | | | | | |
| 27 | | | | 266<br>919<br>978<br>1418<br>4165<br>4291 | | (36)<br>37<br>48<br>(317)<br>318<br>(802)<br>803<br>924<br>1494<br>(1740)<br>1741<br>4142<br>4193 | 8<br>15<br>273<br>925<br>1088<br>1418<br>1552 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 28 | | 8<br>250<br>271<br>924<br>1418<br>1511<br>1791<br>4139 | 28<br>48<br>255<br>266<br>318<br>328<br>803<br>919<br>1088<br>4291 | | 8<br>15<br>48<br>58<br>266<br>(317)<br>318<br>337<br>1418<br>1511<br>1639<br>1791<br>3399<br>3846<br>4291<br>4344 | | 28<br>48<br>318<br>(802)<br>803<br>1418<br>4291 | | 48<br>919<br>1161<br>2103<br>4290 | | | 28<br>235<br>1812 | | | | | 15<br>28<br>48<br>318<br>337<br>375<br>574<br>1088<br>1418<br>1444<br>1511<br>3399<br>4290<br>4291<br>4292<br>4346 | | | | | 15<br>28<br>58<br>250<br>253<br>254<br>271<br>316<br>318<br>337<br>905<br>924<br>925<br>1639<br>4139<br>4143 | 28<br>48<br>318<br>803<br>4290 | | |
| 29 | 48<br>318<br>4291 | | 28<br>48<br>255<br>266<br>803<br>919<br>1088<br>4291 | | | 15<br>48<br>266<br>(317)<br>318<br>337<br>(802)<br>803<br>919<br>924<br>978<br>1089<br>1418<br>1511<br>3399<br>3452<br>4141<br>4291 | | | | 30<br>266<br>318<br>337<br>803<br>924<br>4290<br>4291<br>4292 | 8<br>28<br>142<br>255<br>264<br>803<br>905<br>925<br>1418<br>1812<br>4291<br>4292 | | | | | 255 | | | 28<br>48<br>266<br>318<br>582<br>803<br>919<br>1418<br>4290<br>4291 | | | | | | 15<br>28<br>48<br>255<br>(317)<br>318<br>375<br>(802)<br>803<br>1418<br>4139 |
| 30 | | | | | | | | | 48<br>51<br>266<br>(802)<br>803<br>919<br>1088 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 31 | | | | | 8<br>15<br>48<br>58<br>266<br>(317)<br>318<br>337<br>1418<br>1639<br>1791<br>3399<br>4291<br>4344 | | | 8<br>15<br>266<br>318<br>803<br>1418<br>1639<br>3373<br>4290<br>4327 | 1160<br>1161<br>1872<br>4291 | 15<br>28<br>58<br>250<br>318<br>798<br>1639<br>3399<br>4290<br>4346 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 32 | | 48<br>449<br>893<br>925<br>1089<br>1138<br>1418<br>1511<br>1791<br>3447<br>4290 | | 15<br>103<br>104<br>266<br>316<br>318<br>4290 | | | 30<br>31<br>46<br>264<br>266<br>318 | | | | | | | | | | | | | | | | | 15<br>48<br>318<br>337<br>979<br>4291<br>4322 | |
| (33) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 8<br>15<br>250<br>266<br>318<br>337<br>582<br>925<br>1088<br>1418<br>1568<br>4290 | | |
| 34 | 8<br>48<br>803<br>919<br>4291<br>4420 | | | 64<br>266<br>919<br>978 | | 15<br>28<br>48<br>(317)<br>318<br>(802)<br>803<br>1418<br>1791<br>4292 | 328<br>822<br>978<br>1418<br>4291 | 266<br>1418<br>1424<br>4291 | 105<br>266<br>924<br>1418<br>1435<br>1511<br>4516 | | | 28<br>328<br>803<br>919<br>1088<br>1418<br>1511<br>3816<br>4291 | | | | | | | | (2)<br>15<br>48<br>63<br>318<br>1418<br>4029 | | | | | | |
| 35 | | | 133<br>255<br>266<br>271<br>924<br>1424<br>4150<br>4290<br>4291 | 264<br>266<br>318<br>337<br>338<br>348<br>803<br>919<br>4290<br>4291<br>4292 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 36 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 37 | 8<br>28<br>803<br>919<br>4291<br>4420 | 8<br>48<br>255<br>328<br>893<br>919<br>1088<br>1418<br>1714<br>3399<br>4290<br>4291 | (2)<br>28<br>266<br>271<br>318<br>328<br>880<br>4292 | 28<br>266<br>318<br>803<br>1511<br>4292 | (2)<br>8<br>15<br>105<br>266<br>337<br>924<br>1418<br>1435<br>1511<br>3317<br>4291<br>4516 | | | | | | | 266<br>(317)<br>318<br>(802)<br>803<br>1018<br>1418<br>3399<br>4291 | 8<br>23<br>24<br>27<br>30<br>64<br>141<br>142<br>255<br>266<br>318<br>822<br>978<br>1088<br>1201<br>1418<br>1791<br>4466 | 15<br>28<br>30<br>58<br>250<br>266<br>318<br>337<br>(802)<br>803<br>924<br>1639<br>4290<br>4291<br>4292 | | | | | (2)<br>15<br>48<br>318<br>(802)<br>803<br>1418<br>4029<br>4344<br>4346 | 15<br>28<br>254<br>925<br>4292 | | | | |

| 年＼教科書会社名 | 日本書籍 | 東京書籍 | 学校図書 | 三省堂 | 教育出版 | 光村図書 | 大阪書籍 | 筑摩書房 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 41年 | 8<br>48<br>803<br>919<br>1418<br>3399<br>4291 | 8<br>48<br>255<br>328<br>893<br>919<br>1088<br>1418<br>1714<br>3393<br>4290<br>4291 | | 15<br>28<br>266<br>318<br>802<br>803<br>1418<br>1791<br>4291<br>4346 | 8<br>15<br>48<br>266<br>802<br>803<br>919<br>924<br>1088<br>1418<br>3399<br>4139<br>4291<br>4346 | 15<br>28<br>264<br>318<br>802<br>803<br>4291 | 8<br>27<br>30<br>266<br>271<br>822<br>893<br>924<br>925<br>978<br>1418<br>4466 | 15<br>48<br>318<br>337<br>979<br>4291<br>4322 |
| 42 | | | | | | | | |
| 43 | | | | | | | | |
| 44 | 8<br>48<br>802<br>803<br>919<br>1418<br>3399<br>4290 | 8<br>255<br>328<br>893<br>919<br>1088<br>1418<br>1714<br>3399<br>4290 | 28<br>266<br>318<br>880<br>4292 | 28<br>270<br>317<br>318<br>899<br>1088<br>3399<br>4292<br>4344<br>4346 | | | | |
| 45 | | | | | | | | |
| 46 | | | | | | | | |
| 47 | 8<br>28<br>48<br>802<br>803<br>919<br>3399<br>4291<br>4401 | 28<br>255<br>802<br>919<br>1088<br>1418<br>3399<br>4290<br>4344 | 28<br>266<br>802 | 48<br>133<br>318<br>464<br>608<br>803<br>1406<br>1418<br>1511<br>3249<br>3399<br>3515 | 2<br>8<br>48<br>133<br>236<br>237<br>318<br>416<br>803<br>1418<br>1791<br>3459<br>4139<br>4322 | 8<br>28<br>48<br>266<br>318<br>802<br>803<br>1424<br>3399<br>4139<br>4291<br>4346<br>4349 | | |
| 48 | | | | | | | | |
| 49 | | | | | | | | |
| 50 | | | | 107<br>108<br>133<br>166<br>208<br>318<br>451<br>1418<br>3399<br>3515<br>3570<br>4292 | | | | |
| 51 | | | | | | | | |
| 52 | | | | | | | | |
| 53 | 8<br>48<br>107<br>108<br>802<br>803<br>919<br>3373<br>3399<br>4291<br>4325<br>4401 | 20<br>28<br>48<br>802<br>803<br>3399<br>4291 | 28<br>48<br>318<br>802<br>803<br>1418<br>1791<br>3399<br>3774<br>4346 | 4402 | 2<br>8<br>48<br>318<br>803<br>3459<br>4139<br>4322 | 28<br>48<br>142<br>255<br>318<br>337<br>488<br>506<br>3399<br>4291<br>4322<br>4346 | | |
| 54 | | | | | | | | |
| 55 | | | | | | | | |
| 56 | …… | | 8<br>48<br>318<br>802<br>803<br>1418<br>3459<br>4139<br>4346<br>4425 | 107<br>108<br>133<br>166<br>208<br>318<br>451<br>453<br>1418<br>3399<br>3515<br>4292<br>4402 | 2<br>8<br>105<br>266<br>317<br>318<br>416<br>803<br>1018<br>3459<br>4292<br>4337 | 20<br>48<br>317<br>318<br>337<br>1088<br>1418<br>3399<br>4291<br>4401 | | |
| 57 | | | | | | | | |
| 58 | | | | | | | | |
| 59 | | | | 107<br>108<br>133<br>166<br>208<br>318<br>451<br>453<br>803<br>1418<br>3399<br>3515<br>4292<br>4402 | | 8<br>48<br>317<br>318<br>337<br>1018<br>1418<br>3399<br>4291<br>4401 | | |

- 上記の歌番号のうち，○で囲んだものは長歌である。
- 改訂の時期は―で示した。
- 学年が２つ以上にまたがっているのも歌番号順に整理した。
- ……は教科書が発行されていないことを示す。

・戦後の中学校教科書に採用された万葉集教材の年代別採用状況　　資料－2（No.1）

（萬葉集　本文篇　佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著　塙書房）

| 歌番号 | 作者 | 作品 | 明治大正 | 昭(前) | 20年代 | 30年代 | 40年代 | 50年代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1・② | 舒明天皇 | 大和には群山あれどとりよろふ天の香具山登りたち国見をすれば国原は | | ◎ | | ○ | ○ | ○ |
| | | 煙立ち立つ海原はかまめ立ち立つうまし国そあきづ島大和の国は | | | | | | |
| 8 | 額田王 | 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15 | 天智天皇 | わたつみの豊旗雲に入り日さし今夜の月夜さやけかりこそ | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 20 | 額田王 | あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る | | | | | | ○ |
| 23 | 作者未詳 | 打麻を麻続王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります | | | | ○ | | |
| 24 | 麻続王 | うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良虞の島の玉藻刈り食む | | | | ○ | | |
| 27 | 天武天皇 | 良き人の良しとよく見て良しと言ひし吉野よく見よ良き人良く見 | | | | ○ | | |
| 28 | 持統天皇 | 春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山 | | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |
| 30 | 柿本人麿 | 楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 31 | 〃 | 楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも | ○ | ○ | | ○ | | |
| ㊱ | 〃 | やすみしし我が大君の聞しをす天の下に国はしもさはにあれども山川の清き | ○ | ○ | ○ | | | |
| | | 河内と御心を吉野の国の花散らふ秋津の野辺に宮柱太しきませばももしきの | | | | | | |
| | | 大宮人は船並めて朝川渡り舟競ひ夕川渡るこの川の絶ゆることなくこの | | | | | | |
| | | 山のいや高知らすみなそそく瀧のみやこは見れど飽かぬかも | | | | | | |
| 37 | 〃 | 見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む | ○ | ○ | ○ | | | |
| 43 | 当麻真人麿の妻 | 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ | | ○ | ○ | | | |
| 46 | 柿本人麿 | 阿騎の野に宿る旅人うちなびき眠も寝らめやも古思ふに | | | | ○ | | |
| 48 | 〃 | 東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| 51 | 志貴皇子 | 采女の袖吹き返す明日香風京を遠みいたづらに吹く | | | ○ | | | |
| 58 | 高市黒人 | いづくにか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし棚なし小舟 | | ○ | ○ | ○ | | |
| 63 | 山上憶良 | いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ | ○ | | | ○ | | |
| 64 | 志貴皇子 | 葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ | | | ○ | ○ | | |
| 2・103 | 天武天皇 | 我が里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後 | | | ○ | | | |
| 104 | 藤原夫人 | 我が岡の龍に言ひて降らしめし雪の砕けしそこに散りけむ | | | ○ | | | |
| 105 | 大伯皇女 | わが背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし | | | | ○ | | ○ |
| 107 | 大津皇子 | あしひきの山のしづくに妹待つと我立ち濡れぬ山のしづくに | | | | | ○ | ○ |
| 108 | 石川郎女 | 我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを | | | | | ○ | ○ |
| 133 | 柿本人麿 | 笹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば | | | ○ | ◎ | ○ | ○ |
| 141 | 有馬皇子 | 磐代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む | | | | ○ | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 142 | 有馬皇子 | 家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| 166 | 大伯皇女 | 磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに | | | | | ○ | ○ |
| 208 | 柿本人麿 | 秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山路知らずも | | | | | ○ | ○ |
| 3・235 | 〃 | 大君は神にしませば天雲の雷の上に廬りせるかも | | | ○ | | | |
| 236 | 持統天皇 | 否と言へど強ふる志斐のが強ひ語りこのころ聞かずて朕恋ひにけり | | | | | ○ | |
| 237 | 志斐の嫗 | 否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強ひ語りと言ふ | | | | | ○ | |
| 250 | 柿本人麿 | 玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近付きぬ | | ○ | ○ | ○ | | |
| 253 | 〃 | 稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき加古の島見ゆ | | | ○ | | | |
| 254 | 〃 | 燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず | | | ○ | ○ | | |
| 255 | 〃 | 天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 264 | 〃 | もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行くへ知らずも | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 266 | 〃 | 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 270 | 高市黒人 | 旅にしてもの恋しきに山下のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ | | | | | ○ | |
| 271 | 〃 | 桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る | | ○ | ○ | ○ | | |
| 273 | 〃 | 磯の崎漕ぎたみ行けば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く | | | ○ | | | |
| 316 | 大伴旅人 | 昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりにけるかも | | ○ | ○ | | | |
| (317) | 山部赤人 | 天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天の原振り放け見れば渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず白雲もい行きはばかり時じくそ雪は降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 318 | 〃 | 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 328 | 小野老 | あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ | |
| 337 | 山上憶良 | 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 338 | 大伴旅人 | 験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし | | | | ○ | | |
| 348 | 〃 | この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも我はなりなむ | | | | ○ | | |
| 375 | 湯原王 | 吉野なる夏実の川の川淀に鴨そ鳴くなる山影にして | | | ○ | | | |
| 416 | 大津皇子 | ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ | | | | | ○ | ○ |
| 449 | 大伴旅人 | 妹と来し敏馬の崎を帰るさにひとりし見れば涙ぐましも | | | ○ | ○ | | |
| 451 | 〃 | 人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり | | | | | ○ | ○ |
| 453 | 〃 | 我妹子が植ゑし梅の木見るごとに心むせつつ涙し流る | | | | | | ○ |
| 464 | 大伴家持 | 秋さらば見つつしのへと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも | | | | | ○ | |
| 4・488 | 額田王 | 君待つと我が恋ひ居れば我がやどの簾動かし秋の風吹く | | | | | | ○ |
| 506 | 安部女郎 | 我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我がなけなくに | | | | | | ○ |
| 574 | 大伴旅人 | ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしあるらし | | ○ | ○ | | | |
| 582 | 坂上大嬢 | ますらをもかく恋ひけるをたわやめの恋ふる心にたぐひあらめやも | | | ○ | ○ | | |
| 608 | 笠女郎 | 相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づくがごとし | | | | | ○ | |
| 5・798 | 山上憶良 | 妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに | | | ○ | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 802 | 山上憶良 | 瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆいづくより来りしものそまなかにもとなかかりて安眠しなさぬ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 803 | 〃 | 銀も金も玉もなにせむに優れる宝子に及かめやも | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 818 | 〃 | 春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ | | | ○ | | | |
| 822 | 大伴旅人 | 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも | | | | ○ | | |
| 880 | 山上憶良 | 天離る鄙に五年住まひつつ都のてぶり忘らえにけり | | ○ | | ○ | ○ | |
| 893 | 〃 | 世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば | ○ | | ○ | ○ | ○ | |
| 899 | 〃 | すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど此らに障りぬ | | | | | ○ | |
| 905 | 〃 | 若ければ道行き知らじ賂はせむしたへの使負ひて通らせ | | | ○ | | | |
| 6・919 | 山部赤人 | 若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 924 | 〃 | み吉野の象山のまの木末にはここだもさわく鳥の声かも | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 925 | 〃 | ぬばたまの夜のふけ行けば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く | ○ | ○ | ◎ | ◎ | | |
| 978 | 山上憶良 | 士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして | ○ | ◎ | ○ | ◎ | | |
| 979 | 坂上郎女 | 我が背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 1018 | 元興寺の僧 | 白玉は人に知らえず知らずともよし知らずとも我し知れらば知らずともよし | ○ | ○ | | ○ | | ○ |
| 7・1087 | 人麿歌集 | 痛足川川波立ちぬ巻向の弓月が岳に雲居立つらし | | | ○ | | | |
| 1088 | 〃 | あしひきの山川の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ち渡る | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 1089 | 作者未詳 | 大き海に島もあらなくに海原のたゆたふ波に立てる白雲 | | ○ | ◎ | ○ | | |
| 1138 | 〃 | 宇治川を舟渡せをと呼ばへども聞こえずあらし梶の音もせず | | | ○ | ○ | | |
| 1160 | 〃 | 難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ | | | ○ | | | |
| 1161 | 〃 | 家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴きわたる | | | ○ | | | |
| 1201 | 〃 | 大き海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯のさやけさ | | | | ○ | | |
| 1288 | 人麿歌集 | 水門の葦の末葉を誰か手折りし我が背子が振る手を見むと我そ手折りし | | | ○ | | | |
| 1406 | 作者未詳 | 秋津野に朝居る雲の失せ行けば昨日も今日もなき人思ほゆ | | | | | ○ | |
| 8・1418 | 志貴皇子 | 石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも | | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ |
| 1424 | 山部赤人 | 春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝にける | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 1435 | 厚見王 | かはづ鳴く神奈備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花 | | ○ | | ○ | | |
| 1444 | 高田女王 | 山吹の咲きたる野辺のつほすみれこの春の雨に盛りなりけり | | | ○ | | | |
| 1494 | 大伴家持 | 夏山の木末のしげにほととぎす鳴きとよむなる声の遥けさ | | | ○ | | | |
| 1511 | 舒明天皇 | 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも | | ○ | ◎ | ◎ | ○ | |
| 1552 | 湯原王 | 夕月夜心もしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも | | | ○ | | | |
| 1568 | 大伴家持 | 雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色付きにけり | | | | ○ | | |
| 1639 | 大伴旅人 | 沫雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも | | | ○ | ○ | | |
| 9・1714 | 作者未詳 | 落ち激ち流るる水の岩に触れ淀める淀に月の影見ゆ | | ○ | | ○ | ○ | |
| 1740 | 虫麿歌集 | 春の日の霞める時に墨吉の岸に出で居て釣舟のとをらふ見れば古の事そ思ほゆる水江の浦島子が鰹釣り鯛釣り誇り七日まで家にも来ずて海 | | | ○ | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 界を過ぎて漕ぎ行くに海神の娘子にたまさかにい漕ぎ向かひ相とぶらひ言成りしかばかき結び常世に至り海神の宮の内への妙なる殿に携はり二人入り居て老いもせず死にもせずして永き世にありけるものを世間の愚人の吾妹子に告りて語らくしましくは家に帰りて父母に事も語らひ明日のごと我は来なむと言ひければ妹が言へらく常世辺にまた帰り来て今のごと逢はむとならばこのくしげ開くなゆめとそこらくに堅めしことを墨吉に帰り来りて家見れど家も見かねて里見れど里も見かねて怪しみとそこに思はく家ゆ出でて三年の間に垣もなく家失せめやとこの箱を開きて見てばもとのごと家はあらむと玉くしげ少し開くに白雲の箱より出でて常世辺にたなびきぬれば立ち走り叫び袖振り臥いまろび足ずりしつつたちまちに心消失せぬ若かりし肌もしわみぬ黒かりし髪も白けぬゆなゆなは息さへ絶えて後つひに命死にける水江の浦島子が家所見ゆ | | | | | | |
| 1741 | 虫麿歌集 | 常世辺に住むべきものを剣大刀己が心からおそやこの君 | | | ○ | | | |
| 1791 | 遣唐使随員の母 | 旅人の宿りせむ野に霜降らば我が子羽ぐくめ天の鶴群 | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |
| 10・1812 | 人麿歌集 | ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも | | | ○ | | | |
| 1821 | 作者未詳 | 春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちてうぐひす鳴くも | | | ○ | | | |
| 1872 | 〃 | 見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも | | | ○ | | | |
| 2103 | 〃 | 秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に | | | ○ | | | |
| 13・3249 | 〃 | 磯城島の大和の国に人二人ありとし思はば何か嘆かむ | | | | | ○ | |
| 3317 | 〃 | 馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも我は二人行かむ | | | | ○ | | |
| 14・3373 | 東歌 | 多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のここだかなしき | | | ○ | | | ○ |
| 3393 | 〃 | 筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ母い守れども魂そ合ひにける | | | | ○ | | |
| 3399 | 〃 | 信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましむな沓はけ我が背 | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3447 | 〃 | 草陰の安努な行かむと墾りし道安努は行かずて荒草立ちぬ | | | ○ | ○ | | |
| 3452 | 〃 | おもしろき野をばな焼きそ古草に新草交じり生ひは生ふるがに | | | ○ | ○ | | |
| 3459 | 〃 | 稲搗けばかかる我が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ | | | | | ○ | ○ |
| 3515 | 〃 | 我が面の忘れむしだは国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲はせ | | | | | ○ | ○ |
| 3570 | 防人歌 | 葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ | | | | | ○ | ○ |
| 15・3774 | 狭野弟上娘子 | 我が背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな | | | | | | ○ |
| 16・3816 | 穂積親王 | 家にある櫃に鏁刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかりて | | | | ○ | | |
| 3846 | 作者未詳 | 法師らが鬢の剃り抗馬繋ぎいたくな引きそ僧は泣かむ | | | ○ | | | |
| 17・4029 | 大伴家持 | 珠州の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり | | | | ○ | | |
| 19・4139 | 〃 | 春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子 | | | ○ | | ○ | ○ |
| 19・4141 | 〃 | 春まけてもの悲しきにさ夜ふけて羽振き鳴く鴨誰が田にか住む | | | ○ | | | |
| 4142 | 〃 | 春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ | | | ○ | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4143 | 大伴家持 | もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花 | | | ○ | | | |
| 4150 | 〃 | 朝床に聞けば遥けし射水川朝漕ぎしつつ唱ふ舟人 | | | ◦ | ○ | | |
| 4165 | 〃 | ますらをは名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も語り継ぐがね | ○ | ○ | ○ | | | |
| 4193 | 〃 | ほととぎす鳴く羽触れにも散りにけり盛り過ぐらし藤波の花 | | | ○ | | | |
| 4290 | 〃 | 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4291 | 〃 | 我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも | | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 4292 | 〃 | うららうらに照れる春日にひばりあがり心悲しも一人し思へば | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 20・4322 | 防人歌 | 我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見へてよに忘られず | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4325 | 〃 | 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ | ○ | | | | | ○ |
| 4327 | 〃 | 我が妻も画に描き取らむ暇もが旅行く我は見つつ偲はむ | | | ○ | | | |
| 4337 | 〃 | 水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき | | | | | | ○ |
| 4344 | 〃 | 忘らむて野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも | | | ○ | ○ | ○ | |
| 4346 | 〃 | 父母が頭掻き撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ |
| 4349 | 〃 | 百隈の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ | | | | | ○ | |
| 4364 | 〃 | 防人に立たむ騒きに家の妹が業るべき事を言はず来ぬかも | | | | | ○ | |
| 4401 | 〃 | 韓衣裾に取り付き泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして | | | | | ○ | ○ |
| 4402 | 〃 | ちはやふる神のみ坂に幣奉り斎ふ命は母父が為 | | | | | ○ | ○ |
| 4420 | 〃 | 草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と付けろこれの針もし | | | | ○ | | |
| 4425 | 〃 | 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思ひもせず | | | | | | ○ |
| 4434 | 大伴家持 | ひばりあがる春へとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく | | | ○ | | | |
| 4466 | 〃 | 礒城島の大和の国に明らけき名に負ふ伴の緒心努めよ | | | | | ○ | |
| 4516 | 〃 | 新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや頻け吉事 | | | | ○ | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | （小学校のみ） | | | | | | |
| 16・3853 | 大伴家持 | 石麻呂に我物申す夏痩せに良しといふものそ鰻取り喫 | | | | ◦ | | |
| 3854 | 〃 | 痩す痩すも生けらばあらむをはたやはた鰻を取ると川に流るな | | | | ◦ | | |

・明治/大正/昭和(戦前)に採用されていて，それ以後採用されないもの　　資料－3　(No. 1)

| 歌番号 | 作者 | 作品 | 明治・大正 | 昭(戦前) | 20年代 | 30年代 | 40年代 | 50年代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 巻1・③ | 中皇命 | やすみしし我が大君の朝にはとり撫でたまひ夕にはい寄り立たししみとらしの梓の弓の中弭の音すなり朝狩に今立たすらし夕狩に今立たすらしみとらしの梓の弓の中弭の音すなり | | ○ | | | | |
| 4 | 〃 | たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野 | | ○ | | | | |
| 7 | 額田王 | 秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治のみやこの仮廬し思ほゆ | ○ | | | | | |
| ⑯ | 〃 | 冬ごもり春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ咲かざりし花も咲けれど山をしみ入りても取らず草深み取りても見ず秋山の木の葉を見ては黄葉をば取りてそしのふ青きをば置きてそ歎くそこし恨めし秋山そ我は | | ○ | | | | |
| 22 | 吹茨刀自 | 河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常娘子にて | | ○ | | | | |
| ㉙ | 柿本人麿 | 玉だすき畝火の山の橿原のひじりの御代ゆ生れましし神のことごとつがの木のいやつぎつぎに天の下知らしめししを天にみつ大和を置きてあをによし奈良山を越えいかさまに思ほしめせかあまざかる鄙にはあれどいはばしる近江の国の楽浪の大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇の神の尊の大宮はここと聞けども大殿はここと言へども春草のしげく生ひたる霞立ち春日の霧れるももしきの大宮所見れば悲しも | ○ | ○ | | | | |
| 33 | 高市黒人 | 楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも | ○ | | | | | |
| ㊳ | 柿本人麿 | やすみしし我が大君神ながら神さびせすと吉野川激つ河内に高殿を高知りまして登り立ち国見をせせばたたなはる青垣山やまつみの奉る御調と春へには花かざし持ち秋立てば黄葉のかざせり行き沿ふ川の神も大御食に仕へ食ると上つ瀬に鵜川を立ち下つ瀬に小網さし渡す山川も依りて仕ふる神の御代かも | ○ | ○ | | | | |
| 39 | 〃 | 山川も依りて仕ふる神ながら激つ河内に舟出せすかも | ○ | ○ | | | | |
| 76 | 元明天皇 | ますらをの靫の音すなりもののふの大臣楯立つらしも | ○ | ○ | | | | |
| 2・132 | 柿本人麿 | 石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか | ○ | ○ | | | | |
| 197 | 〃 | 明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし | | ○ | | | | |
| 223 | 〃 | 鴨山の岩根し枕ける我をかも知らにと妹が待ちつつあらむ | ○ | ○ | | | | |
| 3・265 | 長忌寸奥麿 | 苦しくも降りくる雨か三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに | ○ | | | | | |
| 278 | 石川少郎 | 志賀の海人はめ刈り塩焼き暇なみくしげの小櫛取りも見なくに | | ○ | | | | |
| 3・321 | 虫麿歌集 | 富士の嶺を高み恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを | ○ | ○ | | | | |
| 3・331 | 大伴旅人 | 我が盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ | | ○ | | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 333 | 大伴旅人 | 浅茅原つばらつばらに物思へば古りにし里し思ほゆるかも | | ○ | | | | |
| 351 | 沙弥満誓 | 世間を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし舟の跡なきごとし | ○ | | | | | |
| 364 | 笠金村 | ますらをの弓末振り起こし射つる矢を後見む人は語り継ぐがね | ○ | | | | | |
| 368 | 石上大夫 | 大舟にま梶しじ貫き大君の命恐み磯回するかも | | ○ | | | | |
| 378 | 山部赤人 | 古のふるき堤は年深み池の渚に水草生ひにけり | | ○ | | | | |
| 446 | 大伴旅人 | 我妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき | | ○ | | | | |
| 4・500 | 碁檀越の妻 | 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に | ○ | | | | | |
| 571 | 大伴四綱 | 月夜良し川の音清しいざここに行くも行かぬも遊びて行かむ | | ○ | | | | |
| 575 | 大伴旅人 | 草香江の入江にあさる葦鶴のあなたづたづし友なしにして | | ○ | | | | |
| 5・793 | 〃 | 世間は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり | | ○ | | | | |
| 801 | 山上憶良 | ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りて業をしまさに | ○ | | | | | |
| (892) | 〃 | 風交じり雨降る夜の雨交じり雪降る夜はすべもなく寒くしあれば堅塩を取りつづしろひ糟湯酒うちすすろひてしはぶかひ鼻びしびしに然とあらぬひげ掻き撫でて我を除きて人はあらじと誇ろへど寒くしあれば麻衾引き被り布肩衣ありのことごと着襲へども寒き夜すらを我よりも貧しき人の父母は飢ゑ寒ゆらむ妻子どもは乞ひて泣くらむこの時はいかにしつつか汝が世は渡る（前半を省略して）天地は広しといへど我がためは狭くやなりぬる日月は明しといへど我がためは照りや給はぬ人皆か我のみや然るわくらばに人とはあるを人並に我もなれるを綿もなき布肩衣の海松のごとわわけさがれるかかふのみ肩にうち掛け伏廬の曲廬の内に直土に藁解き敷きて父母は枕の方に妻子どもは足の方に囲み居て憂へ吟ひかまどには火気吹き立てず甑には蜘蛛の巣かきて飯炊くことも忘れてぬえ鳥ののどよひ居るにいとのきて短き物を端切ると言へるがごとくしもと取る里長が声は寝屋処まで来立ち呼ばひぬかくばかりすべなきものか世間の道 | ○ | ○ | | | | |
| 6・(917) | 山部赤人 | やすみししわご大君の常宮と仕へ奉れる雑賀野ゆそがひに見ゆる沖つ島清き渚に風吹けば白波さわき潮干れば玉藻刈りつつ神代より然そ貴き玉津島山 | ○ | | | | | |
| (923) | 〃 | やすみししわご大君の高知らす吉野の宮はたたなづく青垣隠り川なみの清き河内そ春へには花咲きをり秋されば霧立ち渡るその山のいやますますにこの川の絶ゆることなくももしきの大宮人は常に通はむ | ○ | | | | | |
| (926) | 〃 | やすみししわご大君はみ吉野の秋津の小野の野の上には跡見すゑ置きてみ山には射目立て渡し朝狩に鹿猪踏み起こし夕狩に鳥踏み立て馬並めてみ狩そ立たす春の茂野に | ○ | | | | | |
| 927 | 〃 | あしひきの山にも野にもみ狩人猟矢手挟み騒きてあり見ゆ | ○ | | | | | |
| 929 | 笠金村 | 荒野らに里はあれども大君の敷き坐す時は都となりぬ | ○ | | | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 934 | 山部赤人 | 朝なぎに梶の音聞ゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるらし | | ○ | | | | |
| 972 | 高橋虫麿 | 千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とそ思ふ | ○ | | | | | |
| 974 | 聖武天皇 | ますらをの行くとふ道そ凡ろかに思ひて行くなますらをの伴 | ○ | ○ | | | | |
| 982 | 坂上郎女 | ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ | | ○ | | | | |
| 983 | 〃 | 山のはのささらえをとこ天の原門渡る光見らくし良しも | | ○ | | | | |
| 996 | 海大養岡麿 | 御民我生ける験あり天地の栄ゆる時にあへらく思へば | ○ | ○ | | | | |
| 998 | 船王 | 眉のごと雲居に見ゆる阿波の山かけて漕ぐ舟泊まり知らずも | ○ | | | | | |
| 1045 | 作者未詳 | 世間を常なきものと今そ知る奈良の都のうつろふ見れば | | ○ | | | | |
| 7・1068 | 人麿歌集 | 天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ | ○ | ○ | | | | |
| 1101 | 〃 | ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しもあらしかも速き | | ○ | | | | |
| 8・1425 | 山部赤人 | あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいた恋ひめやも | ○ | | | | | |
| 1426 | 〃 | 我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れれば | ○ | | | | | |
| 1427 | 〃 | 明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ | ○ | ○ | | | | |
| 1433 | 坂上郎女 | うち上る佐保の川原の青柳は今は春へとなりにけるかも | | ○ | | | | |
| 1441 | 大伴家持 | うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも | | ○ | | | | |
| (1453) | 笠金村 | 玉だすきかけぬ時なく息の緒に我が思ふ君はうつせみの世の人なれば大君の命恐み夕されば鶴が妻呼ぶ難波潟三津の崎より大舟にま梶しじ貫き白波の高き荒海を島伝ひい別れ行かば留まれる我は幣引き斎ひつつ君をば遣らむはや帰りませ | ○ | ○ | | | | |
| 1479 | 大伴家持 | 隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし | | ○ | | | | |
| 1537 | 山上憶良 | 秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 | ○ | | | | | |
| 1538 | 〃 | 萩の花尾花葛花なでしこが花をみなへしまた藤袴朝顔が花 | ○ | ○ | | | | |
| 1542 | 大伴旅人 | 我が岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも | | ○ | | | | |
| 1593 | 坂上郎女 | こもりくの泊瀬の山は色付きぬしぐれの雨は降りにけらしも | ○ | | | | | |
| 1651 | 〃 | 沫雪のこのころ継ぎてかく降らば梅の初花散りか過ぎなむ | | ○ | | | | |
| 9・1701 | 作者未詳 | さ夜中と夜はふけぬらし雁がねの聞こゆる空を月渡る見ゆ | | ○ | | | | |
| 10・1863 | 〃 | 去年咲きし久木今咲くいたづらに地にか落ちむ見る人なしに | | ○ | | | | |
| 1883 | 〃 | ももしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる | | ○ | | | | |
| 2144 | 〃 | 雁は来ぬ萩は散りぬとさ雄鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり | | ○ | | | | |
| 13・(3314) | 〃 | つぎねふ山背道を他夫の馬より行くに己夫し徒歩より行けば見るごとに音のみし泣かゆそこ思ふに心し痛したらちねの母が形見と我が持てるまそみ鏡に請領巾負ひ並め持ちて馬買へわが背 | | ○ | | | | |
| 3316 | 〃 | まそみ鏡持てれど我は験なし君が歩行よりなづみ行く見れば | | ○ | | | | |
| 15・3580 | 〃 | 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ | | ○ | | | | |
| 3581 | 〃 | 秋さらば相見むものをなにしかも霧に立つべく嘆きしまさむ | | ○ | | | | |
| 3593 | 〃 | 大伴の三津に船乗り漕ぎ出てはいづれの島にいほりせむ我 | | ○ | | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3595 | 作者未詳 | 朝開き漕ぎ出て来れば武庫の浦の潮干の潟に鶴が声すも | | ○ | | | | |
| 3599 | 〃 | 月読の光を清み神島の磯間の浦ゆ舟出す我は | | ○ | | | | |
| 3601 | 〃 | しましくもひとりありうるものにあれや島のむろの木離れてあるらむ | | ○ | | | | |
| 3610 | 〃 | 安胡の浦に舟乗りすらむ娘子らが赤裳の裾に潮満つらむか | | ○ | | | | |
| 3613 | 〃 | 海原を八十島隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつも | | ○ | | | | |
| 3615 | 〃 | 我が故に妹嘆くらし風速の浦の沖辺に霧たなびけり | | ○ | | | | |
| 3624 | 〃 | 我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖辺の方に梶の音すなり | | ○ | | | | |
| 3681 | 秦田麿 | 帰り来て見むと思ひし我がやどの秋萩すすき散りにけむかも | | ○ | | | | |
| 17・3922 | 橘宿禰 | 降る雪の白髪までに大君に仕へ奉れば貴くもあるか | ○ | | | | | |
| 3926 | 大伴家持 | 大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも | ○ | | | | | |
| 3927 | 坂上郎女 | 草枕旅ゆく君を幸くあれと斎瓮据ゑつ我が床の辺に | | ○ | | | | |
| 3963 | 大伴家持 | 世間は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば | ○ | | | | | |
| 18・4097 | 〃 | 天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く | ○ | ○ | | | | |
| 19・(4164) | 〃 | ちちの実の父の命ははそ葉の母の命凡ろかに心尽くして思ふらむその子なれやもますらをや空しくあるべき梓弓末振り起こし投矢持ち千尋射渡し剣太刀腰に取り佩きあしひきの八つ峰踏み越えさしまくる心障らず後の代の語り継ぐべく名を立つべしも | ○ | ○ | | | | |
| 19・4262 | 多治比真人麿 | 唐国に行き足らはして帰り来むますら健男に御酒奉る | | ○ | | | | |
| (4264) | 孝謙天皇 | そらみつ大和の国は水の上は地行くごとく船の上は床に居るごと大神の斎へる国そ四つの船船の舳並べ平けくはや渡り来て返り言奏さむ日に相飲まむ酒そこの豊御酒は | ○ | | | | | |
| 4265 | 〃 | 四つの船はや帰り来としらかつげ朕が裳の裾に斎ひて待たむ | ○ | | | | | |
| 20・4328 | 防人歌 | 大君の命恐み磯に触り海原渡る父母を置きて | ○ | ○ | | | | |
| 4342 | 〃 | 真木柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自面変はりせず | ○ | | | | | |
| 4356 | 〃 | 我が母の袖持ち撫でて我が故に泣きし心を忘らえぬかも | ○ | | | | | |
| 4373 | 〃 | 今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は | | ○ | | | | |
| 4392 | 〃 | 天地のいずれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ | ○ | | | | | |
| 4403 | 〃 | 大君の命恐み青雲のとのびく山を越よて来ぬかむ | ○ | | | | | |
| (4465) | 大伴家持 | ひさかたの天の門開き高千穂の岳に天降りし皇祖の神の御代よりはじ弓を手握り持たし真鹿児矢を手挟み添へて大久米のますら猛男を先に立て勒取り負ほせ山川を岩根さくみて踏み通り国まぎしつつちはやぶる神を言向けまつろはぬ人をも和し掃き清め仕へ奉りて秋津島大和の国の橿原の畝傍の宮に宮柱太知り立てて天の下知らしめける天皇の天の日嗣と継ぎて来る君の御代御代隠さはぬ赤き心を皇辺に極め尽くして仕へ来る祖の職と言立てて授けたまへる子孫のいや継ぎ継ぎに見る人の語り次てて聞く人の鑑にせむをあたらしき清きその名そおぼろかに心思ひて空言も祖の名絶つな大伴の氏と名に負へるますらをの伴 | ○ | ○ | | | | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4467 | 大伴家持 | 剣大刀いよよ磨ぐべし古ゆさやけく負ひて来にしその名そ | ○ | ○ | | | | |
| 4487 | 内相藤原朝臣 | いざ子ども狂わざなせそ天地の固めし国そ大和島根は | ○ | | | | | |

上の表を作るにあたって，万葉集教材が採用されていた教科書を東書文庫で確認した。ここにあげた表は，以下の教科書にもとづいている。

| （中　学　校） | （高　等　女　学　校） |
|---|---|
| ① 朝夷六郎他編『國文教科書』大日本図書M27(二編上下三編) | ① 金子元臣編『實科女學讀本』明治書院　T4(巻 6) |
| ② 藤井乙男編『新編國文讀本』積善館　28(巻 8) | ② 佐々政一編『女子國文教科書』光風館 上級用　7(上・下) |
| ③ 大町芳衛他編『新體中學國文教程』大日本圖書　32(巻10) | ③ 高野辰之編『女子國文讀本』光風館　12(巻 9) |
| ④ 〃　33( 〃 ) | ④ 開成館編輯所『新制女子國語読本』開成館　13(巻10) |
| ⑤ 新保寅次他編『國文讀本』金港堂　〃( 〃 ) | ⑤ 松井簡治編『女子新讀本』三省堂　14( 〃 ) |
| ⑥ 吉川編輯所編『新體國文讀本』吉川半七　33(巻7・9・10) | ⑥ 吉澤義則編『女子國文新選』星野書店　〃( 〃 ) |
| ⑦ 国學院編輯部『中等國文讀本』 〃　36(巻10) | ⑦ 冨山房編輯部『國文女學校用』冨山房　〃( 〃 ) |
| ⑧ 上田萬年編『中學國語讀本』大日本圖書　40( 〃 ) | ⑧ 下田次郎他編『新女子國文』明治書院　15(巻10) |
| ⑨ 啓成社編輯部『新編國文讀本』啓成社　44(巻 9) | ⑨ 藤井乙男他編『修正新編女子國文』修文館　〃( 〃 ) |
| ⑩ 上田萬年編『中學讀本』大日本圖書　45( 〃 ) | ⑩ 八波則吉編『現代女子國語讀本』開成館　〃(巻 9) |
| ⑪ 佐々政一編『新撰国語讀本』明治書院　T1(巻10) | ⑪ 松村武雄編『最新女子國文』宝文館　S 2( 〃 ) |
| ⑫ 藤井乙男編『改訂中等國文讀本』　4(9・10) | ⑫ 明治書院編輯部『女子國文選』明治書院　〃(巻10) |
| ⑬ 保科孝一編『大正國語讀本』育英書院　5( 〃 ) | ⑬ 吉田彌平編『新定女子國文』金港堂　3( 〃 ) |
| ⑭ 新村出編『中等教育國語讀本』開成館　6(巻10) | ⑭ 佐々木信綱他編『最新女子國文讀本』湯川弘文社　9(巻 9) |
| ⑮ 芳賀矢一編『三訂帝國讀本』冨山房　〃( 〃 ) | ⑮ 垣内松三編『女子國文新編』文學社　11( 〃 ) |
| ⑯ 吉澤義則編『中等國語教科書』修文館　10(巻 9) | ⑯ 千田憲編『女子國文新讀本』右文書院　12(巻 8) |
| ⑰ 開成館編輯所『新制中等國語讀本』開成館　〃(巻10) | ⑰ 明治書院編輯部『女子國文選』明治書院　〃(巻 9) |
| ⑱ 八波則吉編『現代國語讀本』開成館　15( 〃 ) | ⑱ 佐々木信綱他『新制最新女子國文讀本』　19( 〃 ) |
| ⑲ 松井簡治編『新撰國文讀本』三省堂　S2( 〃 ) | 湯川弘文社 |
| ⑳ 吉澤義則編『新日本讀本』修文館　3( 〃 ) | |
| ㉑ 藤村作他編『新撰中等國文』至文堂　〃( 〃 ) | |
| ㉒ 東京高等師範付属中学校内国語漢文研究会編『新定國文讀本』目黒書店　〃(巻 5) | |
| ㉓ 保科孝一編『新制昭和國語讀本』育英書院　〃(巻8・9) | |
| ㉔ 芳賀矢一編『帝國讀本』冨山房　12(巻 9) | |
| ㉕ 穎原退蔵他編『新國語讀本』星野書店　〃(巻10) | |
| ㉖ 岩波編輯部『國語』岩波書店　〃(巻 9) | |
| ㉗ 三矢重松編『新制中等新國文』文學社　〃(巻10) | |
| ㉘ 東条操編『新制國語讀本』三省堂　〃( 〃 ) | |

| | | |
|---|---|---|
| ㉙ 開成館編輯所『新制國語讀本』開成館 | 12(巻10 ) | |
| ㉚ 東京師範付属中学校内国語漢文研究会編『中學國文』目黒書店 | 〃(巻 9 ) | |
| ㉛ 文部省『中等國文』 | 18( (1)・(2) ) | |